

令和六年度 奈良県租税教育推進連絡協議会長賞

税と歩む私の人生

西大和学園高等学校1年 佐藤 楓花

「税金。」私はこの言葉を聞いて正直、何も思い浮かばなかった。ぼんやりと国からとられてしまうもの、面倒くさいものという悪いイメージだけが頭に浮かんだ。自分にとって身近なものであるはずなのに。だから私は私の生まれてから未来までを「税」の視点で調べて、見てみようと思う。

まず私が生まれた時、妊婦さんは赤ちゃんが生まれるまで約十四回病院に通わなければならないため多額なお金がかかる。そこで住んでいるところから出るのが妊婦健診診査の助成だ。また出産や育児で休みをとったとき。育休をとるとお給料が出ないことがほとんどだ。そこで受けられるのが出産手当金で一日につき日給の約三分の二を受け取ることができる。このように子供ができたり出産するときも国や地方がお金を出してくれる。みんなで大切な命を守ろうとする姿勢が見られる。次に私が幼稚園に入ったとき。幼稚園や保育所は一部のお金を払うことで利用できる。保育料がタダになるサービスがある。さらに私が病気になったときには乳幼児医療費助成制度を受けることができた。病気やケガの多い年齢の時に病院代や薬代をサポートしてもらえる、ありがたい制度だ。他にも0歳から中学卒業までひと月に数万円か出してもらえるしくみもあった。このように少ない負担で健康を守ったり、収入に関係なく使うことのできるサービスが充実していたので私はとても助けられていたと思う。さらに次は私が家を買ったときの未来だ。家を買ったときには住宅ローン減税があり、家を建てたり買ったりした時に払った税金が戻ってきた。これは金利の負担を減らすために使える仕組みだ。賃貸住宅を借りたときも一部お金を出してもらい親は助かったと話していた。次に私が高齢になったとき。病気で訪問介護を利用した時、負担が一から三割になる。しかも申し込みは必要ない。介護に必要な用具も安くで借りることができたり、助けが必要な人は病院に行くのにタクシー代の一部も出る。

税金はとられるものではなく払うもの。これらの仕組みによる財政が色々な形で私たちの命や暮らしを支えてくれていることが分かった。お金は私たちが生きていくのに欠かせないものだ。しかしどこからどれだけのお金を出すかを民主主義によって私たちが選択しなければならない。今、私たちはとても大切な問題に直面している。借金に頼るといっても社会の一つの形を決めることだ。だからこそ私たちは社会をかたちづくるため共に支え合い考え続けねばならないのだと思う。